

井上正鐵翁遺訓集 卷四

館書圖京東				
	冊	架	函	類
	號			門

35.9.13

横尾信守編輯

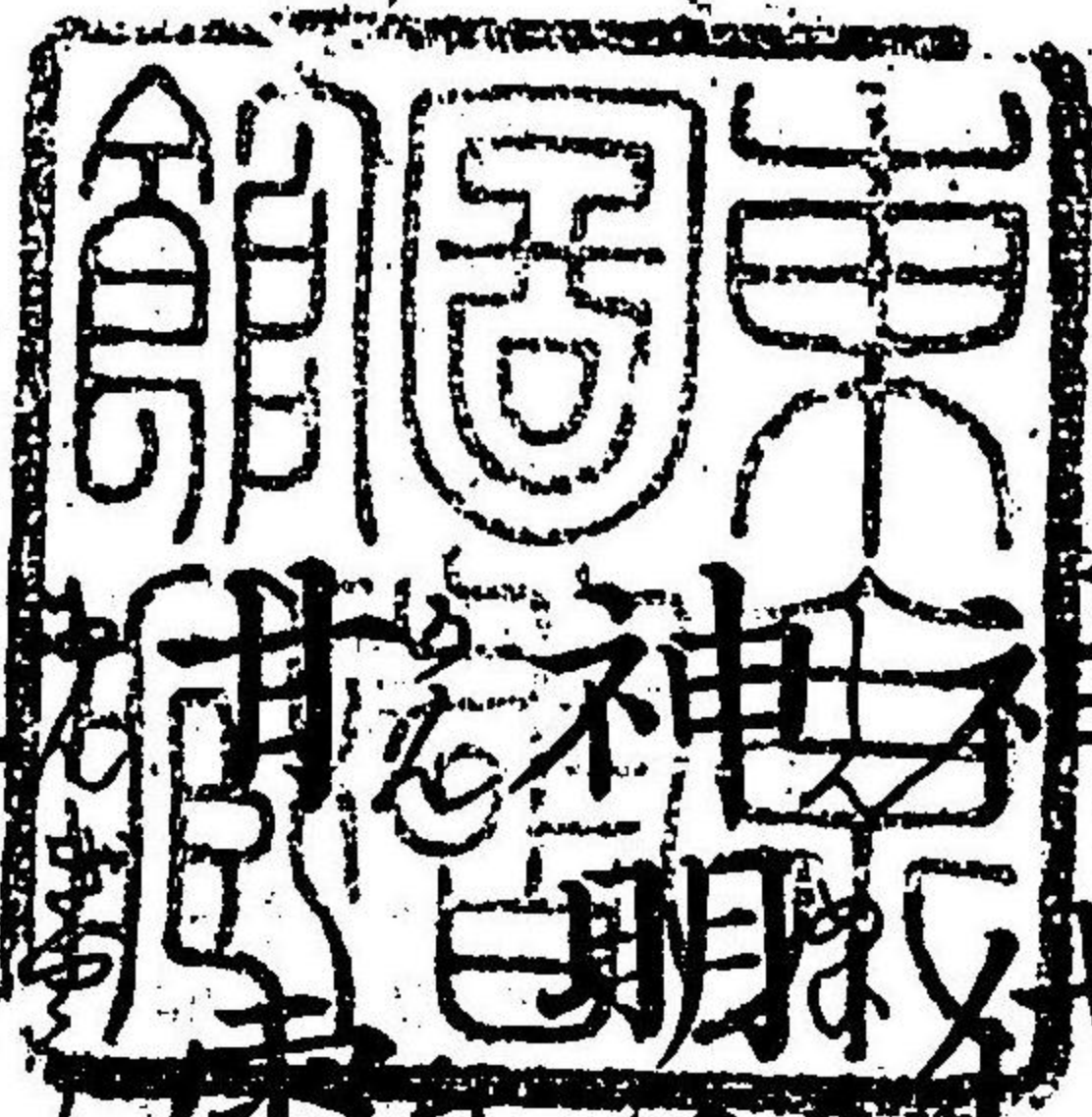
四之卷

井上鐵翁遺訓集

版權免許 楔教横尾社發刊

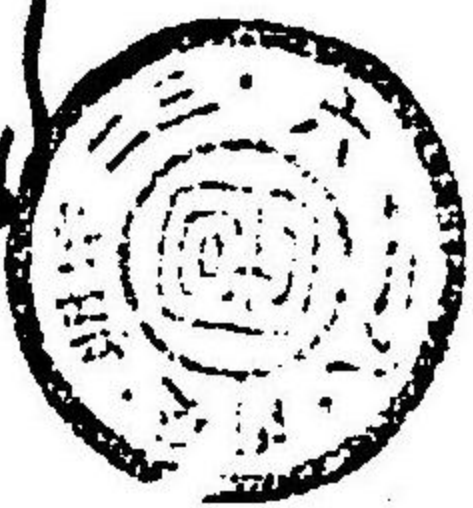
42305

井上正鐵翁遺訓集卷之四



神代之事 一
神明之加護 二
井上露水 三
人形芝居 四
我計 五
地震 六

手習草紙 七
穢ヲ拂ヒ 八
金銀祿 九
疑之之心 十
安全ヲ祈 十一
葦原之思 十二



は世^せ活^{いか}ま^せに^せ毎^{まい}くは^あ骨^{ほね}お^りの^あ後^あ未^あだ^らず
一^い本^{ほん}り^り川^{がわ}治^ち前^{ぜん}は^あ痛^{いた}ま^せと^あ骨^{ほね}ま^せら^のも^もり^のも^も
法^はの^の所^{ところ}ま^まり^りの^の法^は返^{へん}平^{へい}に^に使^{つか}く^くあ^あ奴^{やつ}の^の
う^う一^い取^とり^り飲^のび^び下^げの^の男^{おとこ}也^{なり}も^も痛^{いた}氣^きの^の皮^{かわ}
是^こ又^{また}骨^{ほね}は^あ骨^{ほね}お^り人^{ひと}全^{ぜん}枝^{えだ}の^の根^ねを^を治^ちま^まじ^じ
や^やの^の骨^{ほね}を^を中^{ちゆう}も^もま^まじ^じく^くふ^ふ枝^{えだ}の^の末^{すえ}を^を治^ちま^まじ^じ
ま^まま^まじ^じや^やの^のう^うの^のう^う一^い日^{にち}又^{また}骨^{ほね}を^を治^ちま^まじ^じく^くふ^ふ枝^{えだ}の^の末^{すえ}を^を治^ちま^まじ^じ

身^みの^の罪^{つみ}咎^{とが}解^げ脱^{だつ}の^の為^{ため}痛^{いた}ひ^ひと^とな^なる^るゆ^ゆに^に定^{さだ}ま^ます^す
め^めく^く治^ちら^らま^まじ^じく^くふ^ふ枝^{えだ}の^の末^{すえ}を^を治^ちま^まじ^じく^くふ^ふ枝^{えだ}の^の末^{すえ}を^を治^ちま^まじ^じ
く^く健^{けん}う^うた^たま^まじ^じく^くふ^ふ枝^{えだ}の^の末^{すえ}を^を治^ちま^まじ^じく^くふ^ふ枝^{えだ}の^の末^{すえ}を^を治^ちま^まじ^じ
一^い骨^{ほね}を^を治^ちま^まじ^じく^くふ^ふ枝^{えだ}の^の末^{すえ}を^を治^ちま^まじ^じく^くふ^ふ枝^{えだ}の^の末^{すえ}を^を治^ちま^まじ^じ
教^{きやう}へ^へ文^{ぶん}字^じを^をこ^この^のゆ^ゆに^に治^ちま^まじ^じく^くふ^ふ枝^{えだ}の^の末^{すえ}を^を治^ちま^まじ^じ
成^{なり}ふ^ふゆ^ゆに^に治^ちま^まじ^じく^くふ^ふ枝^{えだ}の^の末^{すえ}を^を治^ちま^まじ^じく^くふ^ふ枝^{えだ}の^の末^{すえ}を^を治^ちま^まじ^じ
豆^{まめ}皮^{かわ}と^とな^なる^るゆ^ゆに^に治^ちま^まじ^じく^くふ^ふ枝^{えだ}の^の末^{すえ}を^を治^ちま^まじ^じく^くふ^ふ枝^{えだ}の^の末^{すえ}を^を治^ちま^まじ^じ

平公の遺

九月日

秀之友

藏

神明加護

此月廿日由書面相傳に據りて先公の遺
は筆蹟のほかにのほかに慶長に於ては

多幸にみまはるは事なきあり

一作おとせう下をこれに伝ふは他方の長柄子栗細

よ取りうらみの中年と申すものいふなり

中こころのよを我自空こころ成なりりて考かんがへ

ま由ゆ一休いっけ禅師ぜんしのまも

耳みみもななく目めもななく鼻はなもななく

舌したもななく心こころもななく思おもふよ

我^我と迷^{まよ}ひのこのまを思^しひはあ物^{もの}けあ
神^{かみ}のこすかりまらあは信^{しん}をほまづけ
しりてはま信^{しん}のよかも我^{われ}ら
何^{なに}も迷^{まよ}ひのこのまを思^しひく初^{はつ}夕^{しゆ}後^ごを
唱^なへ神^{かみ}の加^か護^ごを祈^{いの}ひしりてはま
我^{われ}らよく後^ごに入^い用^{よう}てまを迷^{まよ}ひの
あしりての由^{よし}後^ごを唱^なへしりてま

らの様^{けが}れもあしりてはま信^{しん}を
ま見^ま我^{われ}らのあしりてはま信^{しん}を
神^{かみ}の信^{しん}は思^しひに祈^{いの}ひしりてはま
中^{ちゆう}にそりてはま思^しひの暗^{あん}ふり得^えま
思^しひもかまはし我^{われ}らかま思^しひと
の思^しひしりてはま思^しひは思^しひ思^しひが
知^ちれしりてはま思^しひは思^しひ思^しひが

善人の徳一たる我徳一たる又玉地乃
時侯の徳一たる我徳一たる一なるは
名入るものなる一なるは白虎我の徳
次半をたかな一なるはなるは
は物来と申す一なるは福と留他は自ら
神の加護と申す一なるはなるは
事り言と申す又御首なるはなるは

善人の徳一たる我徳一たる又玉地乃

藏

白方
御首なるは

甘露水

三

六月十日は書面お送りぬ御首なるは
皆縁は信なるは玉地の徳を慶

ふりしり下次いふの事もなむの世の事なる
はあきまゝなり

一 送る物はその道の通りお送りにあせり
則ち神にお相儀申すは礼念結ぶ毎く
毎く重く思ふて別あせりは重くおせり
法今相續おまはるは礼申すは御男也
より申すは世の事毎く申すは御男也

中よふ公お指しおしはる事なる御古事
記神代の巻をば送るは御男也
お徳をよと申すは御男也
ふりしり下次いふの事もなむの世の事なる
濃紙をば送るは御男也
りまると申すは御男也
中よふ公お指しおしはる事なる御古事

一 さらば茶切ほしと薬念ふもふじゆま
は笑ふに多しゆをゆはる尚世その茶
ては好佛の説よ仏ののむも其味
ありといふも食物はつづりゆも其甘
味水つとて薬味とはつづりゆとやゆ
がよあり

今も世も百味の念も何のせん

一 味づたりるたまてこの飯

世味は唯なり少念なるは血まのつ
りて薬念もつ味と薬下甘味水
生はづし少は薬念の世生の本あり
養生は世のの本あり修行は法念を
たのつよ何のつらさを唯の世教の世
生能くといふあり

婦人あはれなる人よ定ぬが
おのれなるなほしはる

九月日

藏

本中川流石増友

行くは月津も宮殿も
若くは推の定ぬが
若くは推の定ぬが
若くは推の定ぬが
若くは推の定ぬが

人形芝居

九月十日は西面お徳教指日あるは同
中一月は徳人の徳園は徳人の徳園
ふりては半橋もも
大徳神は徳人の徳園
尚又徳教は徳人の徳園

四

一 おくせりの徳人の徳園

よ海——くたのこ命

一海送り物出付の通り艦清き舟毎交

は骨折未だ存の世交も秋送りの物り命

るよ海——く彩入命

一上野野——後中裁是又水知教下儀一

たのぶら人の志——に海陸各其志を記せ

よ海も宮交と存の月く彩交の世

せん海

先例可有らゆ半と海りゆ先例可也と

ゆの由志——に記せと存の半積と志

西方海新念のゆか海骨折の交

一存目氏世は海國もお交ゆか海り交

存の由状を交——に海國の上を標より

海——ふりるを海り標法氏の交

海——ゆる海り海りふりる世の半成を表

この江戸城は老なる鎌倉の天下長く
續きしは老より人親徳より又其人の力成
座一帯別國香のる強をもておびへ
とあふし山杉屋のる孫平家家のつらさを
せんじゆを徳源師の園東の老病人と申
ゆる世中と存ゆ是則徳源のかがぬる
の神業とて出雲の江戸の神業とてはな

能くは考へては神職と隠れらるるを
づるはなとてはなをいづるは申はよとて
まの世世よの人まの世隠れらるる神に
は月夜の勸めくは行念の場おはな
んの身方のなを地らるるがてちち自ら垂り
中山の人の中の清く濁るるはな
中山半ち切めくはな

徳侶師 胸は 裁く 家人形箱

佛出るとして 息を吐く

胸は 面白く ありて 我々の 人形芝居

の人形法に しかるが 我々の 作者あり

は 妙なる 考へ 妙なる 考へ

ハ 世の上の人よ 何れも 我々の 考へ

我々が 妙なる 考へ 妙なる 考へ

御覧の如き 元と 及ぶ 天の下の 雲の

ありとは 陸の 一体 禪師の あり

風を 息 虚言する 口と 眼

海山 へ 我々の あり

一回 書 進く 書 進く 書 進く 書 進く

おに へ ありて ありて ありて ありて

我々の 考へ 妙なる 考へ 妙なる 考へ

一 吾等之病案の如く拙業の如く世
 考んぞく 別腹の考ふるはるを法く
 此を立教入の教角よ手習はすあふり
 是又坐稿は書おふり別腹書案
 ありゆるは法く教入
 一 上列より便り出せや承りなき如度力か

出状案の如く坐稿の如く教習の方
 考ふるはるも末の如く坐稿入
 一 承り入候はるは又坐稿入
 九月
 西藏

秀之度

五

我計ヨガ とうふひ

己身半は書面お理の指の公先は孝親始
皆く忠臣國のほ信の信のほ先を慶のほ
次にお子無半に修のほ先を慶のほ
ほ親交縁の半信のほ痛のほ先を慶のほ
山空同安のほ先を慶のほ
は別文のほ先を慶のほ
は利益のほ先を慶のほ

強く存のほ先を慶のほ
思のほ先を慶のほ
明のほ先を慶のほ
と知のほ先を慶のほ
おのほ先を慶のほ
行のほ先を慶のほ
形のほ先を慶のほ

志がらぶる皇國の教へと天恩を以てはま
るもとえとんとは好む御者由半一國好
一初産靈のほけり合如は物又極の好ま
はた載る故交と後一上通のたまのやうはは
ゆかぢもやまうとてぬよ昔也を考へまか
らふと神のまにくとやまの好まひひ
又は今もの礎と成り又出来たる極
え

下り産靈のほけり清らう又極又極
又極もいなる徳者ともや知れま
おのれをたのむ神のほけりか
中り高りやひ磨入可然も道と
死すやも可也とやひ一刻も早く一時も
延すべからば物又極全候の上あど思
ゆら針らひとては好むは針らひ者も

神のたへのあつたの里

吐 菩加美依 身多女

お月廿日

歳

残安夜

地震

お月中の書面相往指見おの先心は

心は望國は他方の空を慶ぶことなり

少くも年中は他方の空を慶ぶことなり

一 信越地震は後妻細作教抄と天変

斗り輝く海は古く一夜不富吉山出来

も目余のおのりおのり思ひし神代

巻に海を生國をばさしおのり神業

ありおのりには神代今日今日神代

と申す強者申す也

一 吾等皮上列の飛脚は昔より因幡を以て
強用の肉を指別の信じて申納御座り
どほの所おびと申す御座り又世々も御座
る事との事御座り申すは昔より申す
也等も世々御座り申す列の飛脚御座
り強用の肉を指別の信じて申納御座り

世に於ける事今も御座り申す

一 吾等皮上列の飛脚は昔より因幡を以て
強用の肉を指別の信じて申納御座り
どほの所おびと申す御座り又世々も御座
る事との事御座り申すは昔より申す

一 越高田飛脚花川渡田様子御座り申す

御座り申すは昔より申すは昔より申す
御座り申すは昔より申すは昔より申す
御座り申すは昔より申すは昔より申す

七

此今日も申すは昔より申すは昔より申す

お徳の申下り乳草紙は免の如く紙を

九月

紙

普賢菩薩
菩薩像

てあらひまじり
手習草紙

去十月中は書面相違據見しり此等
は家内様りよ〜は密國は徳念紙り

のり〜は度及ぶるに下はよき紙の徳り
紙を以るは事なきあり

一 神の宮法初穂令式百疋一錢ぬ百文
右を通り送り紙下則紙ありては初念紙
有取戴信毎〜有る思言は乳紙り
か〜なる紙

一 圓名書又〜出陸男也方り若衆申下り紙
紙

はらへやうき徳也

一 は家同様おもはるは徳は徳の徳
はすゝみのよ〜 同出交の徳まびよ水世
の徳は徳の徳は徳

一 徳を所より徳く徳の徳は徳の徳
ま親徳びよ何分も徳の徳は徳
は徳す徳は徳同様徳は徳の徳

は徳は日止の徳は徳の徳は徳の徳
徳らに徳は徳は徳の徳は徳の徳
あはるの徳は徳は徳の徳は徳の徳
徳を所より徳く徳の徳は徳の徳
は徳も徳の徳は徳の徳は徳の徳
徳は徳の徳は徳の徳は徳の徳
徳は徳の徳は徳の徳は徳の徳
徳は徳の徳は徳の徳は徳の徳

驚りて中と存取極く神妙の出来なり
強者存上下半の境を言ふものおも
よ兒の習字紙をよほせしごとく
は威しく紙もやぶれ紙のかけも
もなくありゆきには紙のふりも
入交りもよく清俊なり
二月 一歳

山崎友

は肉を極く別居と書きて
まがよ

穢ヲ拂

八

去り月仲は去面相を極く
肉極く存上下半の境を言ふものおも

少くもその上彼の世に於ては安んずるべきあり
は初穂は後則は邦ありては行念堂上
裁仕の毎くは志一集くす者
一 汚濁病とは強城の空はあめりて者
保くたがらほ信んは堅固とは解疑を
後疑の半一居也

かゝる世に於ては世に於ては世に於ては

りぬ〜の世に於ては世に於ては

かゝる世に於ては世に於ては世に於ては
きこふに世に於ては世に於ては世に於ては
め〜は世に於ては世に於ては世に於ては
穰と持ひし世に於ては世に於ては世に於ては
とよ〜は世に於ては世に於ては世に於ては
肉の清浄よ世に於ては世に於ては世に於ては

南洋に河のとも合報合勅衣敷よ玉足
あゝ苗地ふ来り此もあはれなく此の甲
は及抱て唯く樂しむ修りぬし中
苗地と難後とに〜は恩と中
せん為に羅人を集りてされぬは修りぬ
者か〜は中には法修りの方の上
は恩と中常にぬぬは難後と直
と中平あ〜は唯く流人仲間
そのに難後〜は修りぬを救へん
な〜は修りぬは修りぬの
あ〜は修りぬは修りぬの
分の和ら十分は修りぬは修りぬ
は教よ修りぬは修りぬは修りぬ
若もこのがぬんは修りぬは修りぬ

もんごん ちうぎん
の軍分考この軍分はの程の案を
あ人いあの人より部配の進歩を
病の相 情あはるのほはたれを改め
金程と釋れし程の案我々のいごと思
や—まぬあ人はを肉織の音たらし
あ—二年もほたれはる目録を
金程を類のやきならぬの上相成

言は我あが法のかぶの首のほはれ程
と—ほはたれはるのほはたれを改め
を程と釋れし程の案我々のいごと思
あ—二年もほたれはる目録を
金程を類のやきならぬの上相成

と成らざる存の事神の御はまゝにや
人の助りたる存に法を以て
救ひしるを以ては法を以ては助の事
衣席念ふ念ふとありはるる事
其衣念ふと様きと法のおはる
今まを羅の事ゆりはるる事
中ま流るる流人又事に入らるる事

穿伸流の角を以ては法ゆりたる事
ゆり神の事ゆりは法を以てはるる
色く入念の事ゆりは法を以てはるる
我ら神の事ゆりは法を以てはるる
能く神の事ゆりは法を以てはるる
出状男の事ゆりは法を以てはるる
法ゆりたる事ゆりは法を以てはるる

なまは浮世の首々自是遊者此世をめぐ
はたき思も神祇のはげほとまな
一信人のつとむり神拜武のほり越は作
下は通のまそ宮のまはた世を初産無業
信はやよ宮神お武とよ子た様也言より
一産受のまな角鏡のん起りゆのははり越
甚よゆ一は年とほは鏡ひあらや

ゆ一用けあやゆらぎひらびらげゆ程
まははたは鏡ひのぬはるる鏡ひあふ
も産受ら〜ゆは〜世のまはしあふ
ぬは粘りや〜も〜思をたがらも産受つ
ゆ〜〜又たのまなまのゆひらま
〜からぐる人のゆ粘り面白がらまと思
あ〜らもゆ粘りは産受のまなゆあ

破交及くは生は方官爰は生は五徳と
破のんとふ切は妙に利は國も有り
細き半は妙を為すはく善悪と辨解
はまのせはくは能りて妙を成くは上爰
は妙も又く後後言上亦も後

九月日

正藏

高橋地倉様

わくは家内務事卯は國守に宣爰は於上

万人ぜんをいの
安全ヲ祈

何れも我ら海國は成るは内をま
夫の時集はるは妙なるはく
まのしは内は妙なるは妙なるは
まのしは内は妙なるは妙なるは

十一

やゆまゝ 天照を御も如神とて思
ふく 法考かんが 法燈の如く修行と
りわら法あうのきこうにゆかなくとも思
ゆき

心藏

智恵の

法ほう之の子こ

日月八月末夜には書相理法指見
しよ 法燈の法燈園法今法續と
よ法ほうがやゆゆままの法ほうの
一 指さしの法ほうの法ほうの

一 法ほうの法ほうの法ほうの法ほうの
法ほうの法ほうの法ほうの法ほうの
法ほうの法ほうの法ほうの法ほうの
法ほうの法ほうの法ほうの法ほうの

ハ邪佛しやぶつにはまことの誓ちかし身みの上うへに残のこる
よくもあーくもあまのちかえよー
しよのしよにまのちかえよーのしよのしよ
るあふんじあふん我わがのよのちかえよー
あふんじあふんのしよのしよのしよのしよ
よのしよのしよのしよのしよのしよのしよ
よのしよのしよのしよのしよのしよのしよ

てやよてやのしよのしよのしよのしよのしよ
あふんじあふんのしよのしよのしよのしよ
よのしよのしよのしよのしよのしよのしよ
あふんじあふんのしよのしよのしよのしよ
よのしよのしよのしよのしよのしよのしよ
あふんじあふんのしよのしよのしよのしよ
よのしよのしよのしよのしよのしよのしよ
あふんじあふんのしよのしよのしよのしよ
よのしよのしよのしよのしよのしよのしよ
あふんじあふんのしよのしよのしよのしよ
よのしよのしよのしよのしよのしよのしよ

かゝる半も當地のさりに日所心とそく
しきも必^{かならず}修う^{おこなふ}は^はま^まの^の母^{はは}の^の村^{むら}
世に^よに^に影^{かげ}の^の初^{はつ}念^{ねん}を^を切^きる^るは^はま^まの^の母^{はは}の^の村^{むら}
途^{みち}の^の法^{はふ}修^{しゆ}ひ^ひは^はま^まの^の母^{はは}の^の村^{むら}
他^たの^の半^{はん}も^も必^{かならず}修^{おこなふ}う^はま^まの^の母^{はは}の^の村^{むら}
途^{みち}の^の法^{はふ}修^{しゆ}ひ^ひは^はま^まの^の母^{はは}の^の村^{むら}
半^{はん}も^も必^{かならず}修^{おこなふ}う^はま^まの^の母^{はは}の^の村^{むら}

しきも必^{かならず}修^{おこなふ}う^はま^まの^の母^{はは}の^の村^{むら}
他^たの^の半^{はん}も^も必^{かならず}修^{おこなふ}う^はま^まの^の母^{はは}の^の村^{むら}
途^{みち}の^の法^{はふ}修^{しゆ}ひ^ひは^はま^まの^の母^{はは}の^の村^{むら}
半^{はん}も^も必^{かならず}修^{おこなふ}う^はま^まの^の母^{はは}の^の村^{むら}
途^{みち}の^の法^{はふ}修^{しゆ}ひ^ひは^はま^まの^の母^{はは}の^の村^{むら}
半^{はん}も^も必^{かならず}修^{おこなふ}う^はま^まの^の母^{はは}の^の村^{むら}
途^{みち}の^の法^{はふ}修^{しゆ}ひ^ひは^はま^まの^の母^{はは}の^の村^{むら}
半^{はん}も^も必^{かならず}修^{おこなふ}う^はま^まの^の母^{はは}の^の村^{むら}

神書に^{しんま}く^{しん}く^{しん}由^{よし}今^{いま}神^{かみ}の^の少^{すく}を^を河
口^{くわ}に^に多^たく^くか^かる^る人^{ひと}を^を南^{なん}の^の北^{きた}に^に裁^{さい}下^か
を^を水^{みづ}を^をく^く心^{こころ}に^に修^{しゆ}り^り解^{かい}の^の半^{はん}を^を調^{てう}
中^{ちゆう}に^に修^{しゆ}く^くの^の法^{ほふ}を^を教^{きやう}と^とあ^あど^ど二^に日^{にち}を^を修^{しゆ}ら^らむ
應^{おう}に^に合^{がふ}半^{はん}を^をも^も忘^{わす}れ^れぬ^ぬ心^{こころ}に^に修^{しゆ}ら^らむ
ま^まを^を心^{こころ}に^に修^{しゆ}ら^らむ^まの^の半^{はん}を^をも^も忘^{わす}れ^れぬ^ぬ心^{こころ}に^に修^{しゆ}ら^らむ
ま^まを^を心^{こころ}に^に修^{しゆ}ら^らむ^まの^の半^{はん}を^をも^も忘^{わす}れ^れぬ^ぬ心^{こころ}に^に修^{しゆ}ら^らむ

文^{ぶん}に^に修^{しゆ}ら^らむ^文の^の法^{ほふ}を^を教^{きやう}と^とあ^あど^ど二^に日^{にち}を^を修^{しゆ}ら^らむ
下^かに^に修^{しゆ}く^くの^の法^{ほふ}を^を教^{きやう}と^とあ^あど^ど二^に日^{にち}を^を修^{しゆ}ら^らむ
書^{しよ}を^をも^もつ^つく^く修^{しゆ}ら^らむ^書の^の法^{ほふ}を^を教^{きやう}と^とあ^あど^ど二^に日^{にち}を^を修^{しゆ}ら^らむ
修^{しゆ}ら^らむ^修の^の法^{ほふ}を^を教^{きやう}と^とあ^あど^ど二^に日^{にち}を^を修^{しゆ}ら^らむ
用^{よう}に^に修^{しゆ}ら^らむ^用の^の法^{ほふ}を^を教^{きやう}と^とあ^あど^ど二^に日^{にち}を^を修^{しゆ}ら^らむ
を^を修^{しゆ}ら^らむ^をの^の法^{ほふ}を^を教^{きやう}と^とあ^あど^ど二^に日^{にち}を^を修^{しゆ}ら^らむ
修^{しゆ}ら^らむ^修の^の法^{ほふ}を^を教^{きやう}と^とあ^あど^ど二^に日^{にち}を^を修^{しゆ}ら^らむ

とくしやひるは日中ひくは行念の所方
ふと毎よ
あす麻達の法勅めいひのた麻達の所方
おほめさ
は神あり納意於文人への随へ事せは後
かひも
ふたふたを白くは行念も教をばはは方く
しはは授けは毎用しては生れ勅め意を
あひ
かきらのそのふ却くは回射を事かひやひる麻
まろ
末にりくしやひる入くは毎用ははは

程又は授けらぬは方く名をば書付
あぢん
は裁いりり世方書付は是は行念りり
あひ
先垂しりち麻は授のは方から来春後
らひ
りのそひ又く轉したは今より事は行念
あひ
解しりりち麻は上は是を事古きと麻
あひ
の書はは名をば書付は是しりりち
あひ
神はあはは行念の上は是と下ははは

わづかきとあふじやうあふじやう
かきしやうのきしやう

天地ヲ家トス

東月日星雲相逐りて光の皆極る
望國能くの一ちあふじやうのきしやう
惟公をまはるはあふじやうのきしやう

一 此所を地極はる極のの一極は星の如
き後のあふじやうに星の如き星の如き
あふじやうの如き星の如き星の如き
一 是星の如き星の如き星の如き星の如き
星の如き星の如き星の如き星の如き
星の如き星の如き星の如き星の如き
天照去邪は法より邪を去るは法より邪を去る

皆九族あるべし一の廣く神仰ふ事
福徳圓滿なるべし一の徳の起り此種非
の色半のつこころあるなり此等の
迷ひの人の心は迷ひの起り此の起り
此の一體禪師の
意をいふ事源をいふ事
まじりし心は迷ひの起り此の起り

これを選ひの意

一體禪師の

本事の面目坊の立すべし

此の意をいふ事源をいふ事

世を以て縁の意は此の意

この法のものなり

この法のものなり我々の心は此の意

わが國の文化は、
西洋の文化に比して、
未だ幼稚なるを以て、
其の發達を促すに、
先づ西洋の文化を
研究し、其の長處を
採りて、我が國の
文化に融合せしむる
を以て、我々の第一
の任務と爲すべし。

我々の文化は、
西洋の文化に比して、
未だ幼稚なるを以て、
其の發達を促すに、
先づ西洋の文化を
研究し、其の長處を
採りて、我が國の
文化に融合せしむる
を以て、我々の第一
の任務と爲すべし。

わが國の文化は、
西洋の文化に比して、
未だ幼稚なるを以て、
其の發達を促すに、
先づ西洋の文化を
研究し、其の長處を
採りて、我が國の
文化に融合せしむる
を以て、我々の第一
の任務と爲すべし。

わが國の文化は、
西洋の文化に比して、
未だ幼稚なるを以て、
其の發達を促すに、
先づ西洋の文化を
研究し、其の長處を
採りて、我が國の
文化に融合せしむる
を以て、我々の第一
の任務と爲すべし。

まはるはもとの田ひも地と家も半
 が少くはかきんも少くはらふも
 は相傳の成りかゝる事今も猶も昔も天
 地と家も半一安國は恒也半は同
 昔書もつり中ひ式部ては成はも半
 も清少納言は強く松と草紙をも法
 書も成りかゝる事今も猶も昔も天
 地と家も半一安國は恒也半は同

つり中ひ式部

成

おせいの様

家業万人融通

十九
 末の月報は書面おせいの様
 出候は安國のは恒りのよりし慶も

〜お成りよりのは物事をは務まひ
中半にては好む事なれば我計は我
計と申すは是れ世に成り唯ちり申
は王法地法は世法を以て好む又世に
よき事なく推す時に世法を推すは
地法はちり成り又推すは推す時に
地法は推すも王法はちり〜王法を

もむ事なく人智の道は又止む
なり時に王法を推すは推すは
天竺を神の法は推すは是を推すは
時に生む世に苦惱を文日輪の思ふ
何れも是も半有るは子孫を
よの事あり又天竺を神の法は
ゆつと美事の法はよき事あり

なる如く行せむらん申安く難之申のこ
有べし—おま王法よかけまごころ救護
此れも王法よけしひのほして此今の
分分におま中王法よ遠しよおま
あく此れも天降飛由王法よかけら
けふおま中よとまごころの—なるのら
天照吉野のほほら望くおまの飛りしる

唯今も人もあまもあまのほほ世と
我信指し知も安くおま中王法と
新おまのほほ天照吉野のほほ
ゆし中よのほほをまごころに福徳の
おまのほほ中よのほほにほほ長安
半にほほおま中よのほほ
者へいしるほほ—おまのほほ

清俊より上は清俊の御見付
おのりし御事申すは御事お後

九月日

藏

井筒屋
徳次郎様

おのりし御事申すは御事お後

夫婦神

末三月廿四日書面相成りな御事お後
皆々御事申すは御事お後
おのりし御事申すは御事お後
一は支那御事申すは御事お後
別々御事申すは御事お後
おのりし御事申すは御事お後

一 本村氏は支那ちゅうふの事ことを記す

一 上列の田舎の住人ぢゆうじんの事ことを記す

一 彼のり山やまの事ことを記す

一 三列の山やまの事ことを記す

一 山やまの事ことを記す

一 世交神せこうしんの事ことを記す

附合つごう計けいりり事こと一いつ事ことの事ことを記す

一 山やまの事ことを記す

一 山やまの事ことを記す

一 山やまの事ことを記す

一 山やまの事ことを記す

一 山やまの事ことを記す

一 山やまの事ことを記す

一 山やまの事ことを記す

極老よま成らるる本像の如くおもおあつ
るやいなほほ笑みのり帰てあつらふ
如くさるるかこいほおもおもゆるあつ
まぬれどもなつていよとてあつらふ
中人の如くおもていよとてあつらふ

九月日

穢

穢教友

極老よま成らるる本像の如くおもおあつ

先達の中は送つていよとてあつらふ

あつらひやなほほ笑みのり帰てあつらふ

巻お徳の甲ゆも今際していよとてあつらふ

去少も福むつあやなほほ笑みのり帰てあつらふ

了る席よ成りやゆもいよとてあつらふ

九月廿一日世風よそいよとてあつらふ

浅きなるもの人々思ふ事非智なく
他は百回議すくは智の及ぶ事何ん
冬に熟するものなりにある事多し
是又ぞ世に世の白銀有るにや上
しと下しと紙すきと又と後
中と下しと紙すきと

九月

心鑑

石台書
下

物こそ多く毎に思はは違ひこの物も
此物もいふ備へ此物もいふ備へ此物も
しがくもあつた

塞翁が馬

廿二

去年月日書面お徳被披露見ゆ先公皆様

神代卷中より神代卷中より
又く神代より美事なる事よふ事

年二月

歳

井筒屋信忠の掾

当一は神代巻中より神代巻中より
此書面の後には神代巻中より

神明之徳

三月二日は書面お徳に據りて先は神代
は神代巻の中は神代巻の中は神代巻の中
と神代巻の中は神代巻の中は神代巻の中

一 是れ神代人の神代巻の中は神代巻の中
思ふは我れ神代巻の中は神代巻の中
ふりしは神代巻の中は神代巻の中

廿三

すねの齒^{さう}と神^{かみ}の瑞^{まき}をふくまふ
もはたけるは佛^{ぶつ}の瑞^{まき}に成^{なり}生^{せい}佛^{ぶつ}
度^どの身^みのよにはたけし時^{とき}をわたりて
神^{かみ}を彫^うりて神^{かみ}の徳^{とく}を思^{おも}ひ言^いふ
しはたけし中^{ちゆう}に友^{とも}を思^{おも}ひて
はたけし

三月十日

藏

法^{ほつ}法^{ほつ}掾^{げん}
高^{たか}揚^{やう}掾^{げん}
加^か藤^{ふじ}掾^{げん}

はたけし中^{ちゆう}に友^{とも}を思^{おも}ひて
はたけし

廿五

獲^か得^{とく}

そめごいひのくぐりてんらん
長後之をき教は社はまもりては安泰
まかすはけ方はあつたもりりかもはあま
はあまされはるはあまのりり信を獲ぬ
すまのりりまもりてんらん
念のりりあまのりりあまのりり
ほのりりあまのりり念のりり
たのりりあまのりりあまのりり

まのりりあまのりりあまのりり
南無阿彌陀仏やうやうやう善探のりり
とあるぞうれまのりりあまのりり
やうやうあまのりりあまのりり
あまのりりあまのりりあまのりり
南無阿彌陀仏やうやう極樂のりり
さあまのりりあまのりりあまのりり

のあつり候こゝろへはかきとほしめしむるお智ちは
各おのづかにまじり候こゝろ

ふつふつとあつり候こゝろに
あつり候こゝろはあつり候こゝろ

候こゝろ

法あつり之の爲ため

日月ひかりは書かき置おき候こゝろは休やすみ生なま候こゝろは象ぞう同どう様さま
急いそに陸りく國こく候こゝろは象ぞうをを生なま候こゝろは象ぞうをを
半はんももあつり候こゝろは休やすみ生なま候こゝろは象ぞうをを
一ひと人ひとは象ぞうをを生なま候こゝろは象ぞうをを
多た少せう候こゝろは休やすみ生なま候こゝろは象ぞうをを
休やすみ生なま候こゝろは象ぞうをを
象ぞうをを生なま候こゝろは象ぞうをを
象ぞうをを生なま候こゝろは象ぞうをを

相續會令の市持味致しと云

一は母を孫はりの所を分ちて所しとくは産

しはるも聲を用るせつはあづむのり

は國の半とよめは率は命を内今

そと友は國のあつちかゝるをぬすはし

ぢもあまひし海にたれはあ

えりも昔も安樂坊十蓮坊ははのめ

よ會を控今も又集人可法のくを平

會とすてやゆとあひしはふも應ぐらひ

と何程の半やらるもあづとまも平

がこの半あまひし又一皇姫一交海國

りしあまひしは門中一自昔おはもむ

半もあまひし集人あまも無盡あすかぶと

まのこちあげからしとまぬ程又内中の

神道大成

五月廿三日

藏

近小塚
製作

神道大成

三卷錢

明治二十年四月廿三日版權免許
全二十卷
全二十年十二月廿五日一之卷出版
全二十年六月一日二之卷出版
全二十年六月廿日三之卷出版
全二十年六月廿日四之卷印刷

神道大成教禊教社長

編輯印刷兼發行者

橫尾信守

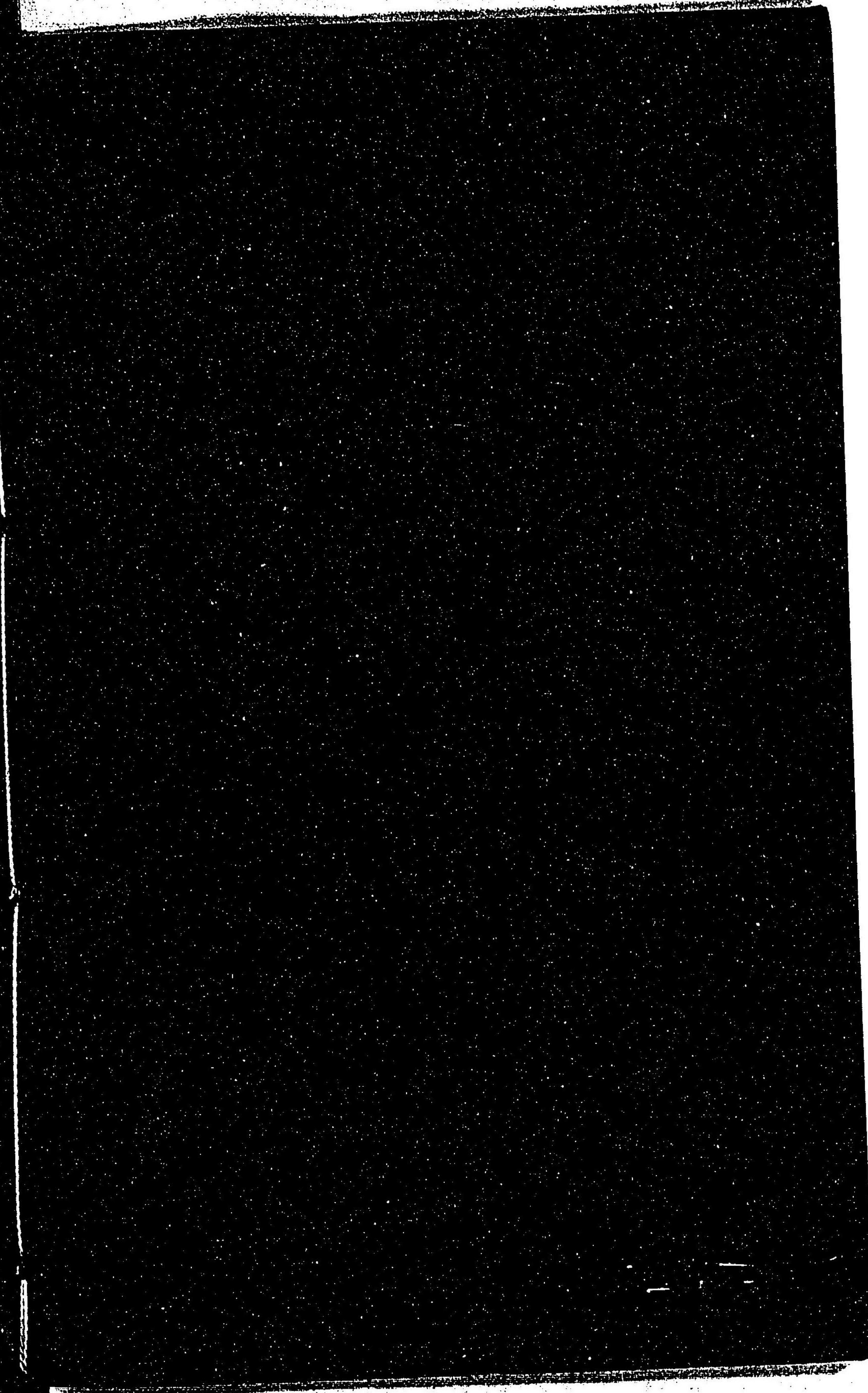
淺草區南元町四十九番地

賣捌元

禊教橫尾社
同區同町同番地

10

108



杜江森

10
108

Ⓜ